



めじかじ
通信

No.160

オーガニックファーム ハスカータ

松野正さん (50歳) 一葉さん (46歳) 山浦

会社員だった松野正さんが

15年前に農業を始めたのは、都内で開かれた「農業フェア」が切っ掛けだった。フェアでは全国から新規営農者を募集していた。熊本県の担当者と話して「金は俺も無いが何とかなる」という気風に引かれ、車で九州まで面接に行った。宮崎市の職員に内定し、ビニールハウス一棟を貰えるはずだったが「姫路には種取りの名人がいて、在来種保存会もある」と聞き、営農地を姫路に決定した。「姫路で3年間ひたすら失敗し続けた」と話す。



同期就農の仲間が「おい。松野の畑だけ丸坊主だぞ」と心配して地主に交渉し、一番肥沃な畑を借りられるようにしてくれた。松野さんは「方向性は見つかったから」と友情と思いやりの気持ちだけ受け取ることにした。

松野さんは「化学肥料を使用する農法を否定しなかったが、その必要がなかった」と話す。目指すのは「水はけと水持ちの良い、スポンジのような土」。草をすき込んで微生物が有機物を分解するのを待つ。「土の改善が一番の早道。自分の農業は、燃料以外は購入せずとも今ここにあるものを使って何とかなっている」という。松野さんは自分で何でもやる。小諸では重機を借りて林の伐採から始めた。農作業の合間に木造平屋の家も建てている。こちらには自己責任の完成予定未定。

姫路から小諸に引っ越したのは、東京にいた両

親が小諸の別荘地に転居した

ことから。様子を見に来て、見晴らしがよく涼涼で病害虫が少なく有機栽培に向いている台地が気に入った。「小諸は、私たちのような『よそ者』が多くて楽ですよ」とのこと。姫路の、7年かけて立派に仕立てた畑は「すぐに借り手が決まり、耕作放棄地にはなっていない」と胸を張る。

妻の一葉さんはオートクチュールでの経験を生かし、舞台衣装の制作者だった。「自然の中で土に触れている生活が面白すぎて、どっぶりハマっている。これは夫が農家への道を選んでくれたお陰。今でもミシンを踏むことはあります」と話す。

松野夫妻の農法だと「植物の循環が畑の土を維持して、劣化させない」ので野菜の世話はあまりしていない。「私たちは微生物が元気に生きられるよう工夫する、畑の管理人」だという。米作りもしている品種は、味が良いものの背丈が高いので倒れやすく農家泣

かせだった「農林22号」。この

オーガニックファームでは、しっかり根を張り倒れない。小諸での農業は5年目になり、作物はいよいよ味が乗って安定してきた。これまではセット野菜の宅配便が主な販売方法だったが、この6月から要望の多かった無人直売も始まる。「調味料と野菜は良質なものを選んでください。料理に奥行きが出て野菜嫌いはなくなりませす。野菜を飾りたせず、たくさん食べてください」。松野夫妻は呼び掛けている。

「松野夫妻は人がやらないことを、楽しんでやっている。野菜はゆっくり育てていて信頼している」と語るのは、御代田町にある和食の店「小田井宿 豊庵」店主の五藤直人さんだ。五藤さんが「サラリーマン料理人」を各地で30年続け、念願の店を開業したのは昨年とのこと。以来、松野夫妻の畑に通って野菜を買い付けている。

(取材・文 佐藤万千子)

エイジングと薬膳

初夏のしみ、しわ対策

鏡を見てギョッ!

しみ、しわが一体いつの間にと嘆いたことはありませんか。中医学では、しみはストレスなどで血行が悪くなった状態をいいます。一方しわは乾燥が原因と考えますが、しみ、しわ共に春から夏にかけて強くなる紫外線も一因。

太陽の下ではサングラス、帽子はシニアにとって必需品です。この他にもストレスを取り除き、血流をよくしておくことが皮膚の老化防止にもつながります。食物でいうと、しみで悩んでいる人は黒いもの。黒豆、黒ゴマ、黒砂糖、ひじき、のりなど黒い食材を積極的にとりませす。さらに豚肉、ゆり根、くるみは肌を潤してくれます。加えてジャスミンティーにはリラックス効果が。

好むと好まざるとにかかわらずできてしまうしわですが、皮膚に欠かせないコラーゲンの代謝を促す杜仲茶がおススメ。目の周りのしわには長芋、栗、クコの実。肌がカサカサしているしわにはビタミンCの多い人参の出番です。

(国際中医薬膳師 小清水ゆら)

